

2019 年度 第 62 回 関東高校サッカー大会県予選 大会総評

「武南高校 7 年ぶり 17 度目の栄冠」

報告者：高体連技術委員 埼玉県立大宮南高等学校 上原克彬

1 大会概要

平成 31 年 4 月 13 日から 29 日にかけて平成最後となる関東高校サッカー大会埼玉県予選が開催された。この大会は 1 月に行われた各支部新人大会上位の 24 チーム及び昨年度全国高校サッカー選手権大会県予選ベスト 8 の 8 チームを合わせた計 32 チームによるトーナメント戦方式で実施された。優勝は武南、準優勝に浦和東、3 位に聖望学園、西武台となった。新人戦覇者の昌平が 2 回戦で敗退、準優勝の正智深谷はベスト 8 で敗退するなど、混沌とした大会でもあった。そうした中、大会を制した武南が第 1 代表として、浦和東が第 2 代表として 5 月 31 日から茨城県で開催される関東大会への出場権を獲得した。

2 本大会出場校 2 チームの技術・戦術的分析

(1) 武南高校

優勝した武南は 5 試合で 14 得点 0 失点。得点力だけではなく、堅守も光る戦いを見せた。武南を日本一に導いた名将・大山照人前監督の魂を受け継ぎ、内野慎一郎監督が率いる新体制での初タイトル。継承と改革、母校の新たな歴史をスタートさせた。

攻撃は個々のスキルの高さを発揮して DF から繋いでビルドアップする。1-4-1-4-1 のシステムをベースに、1 トップの⑩大谷をターゲットにする。中盤の 4 人でボールを保持し、⑩に縦パスを入れることで攻撃のスイッチが入る。また、シャドーの⑦青野、⑬宇田川を中心に個人のキープ力、ドリブル突破、パスとドリブルの使い分けを上手く行い、相手の守備に簡単に的を絞らせない攻撃を展開した。得点パターンは、相手を中央に集結させてからサイドへ展開。右サイド MF⑮小宮のサイド突破、精度の高いクロスからヘディング、こぼれ球のミドルシュート、あるいは CK や FK などセットプレーなど、流れの中でもセットプレーでも得点できる強みがある。決勝戦こそ 1 ゴールに留まったが、準決勝までの試合では 2～5 得点を挙げていることから、決定力の高さや、キッカーの質の高さにおいて、他のチームとの違いを見せた。いくつかの課題として、準決勝の聖望学園戦、3 点リードで迎えた後半、守から攻に移りたいが 3 ラインの間延びとサポートの遅れで 1 トップが孤立しボールを失うシーン。あるいは相手の守備がきちんと対応して守れるようになってきてからは、やり直したりサイドを変えたりという工夫をしないと崩せないシーンで前へと急いでしまい、ボールを失っているシーンの改善が挙げられる。決勝戦では、チームとしてのボールの動かし方が表現しきれなかったように思う。狭い局面は打開できたが、相手をしっかり崩して効果的なフィニッシュにつなげられなかった。個人の能力が高く、結果的には個人の力による攻撃が結果を生んでいた。加えて、ビルドアップからアタック、ゴールまでのストーリーを共有し、それを

選手全員が表現できるようになると、さらに攻撃力が増すのではないだろうか。

守備は攻から守の切り替え早く、複数でボールを奪いに行く。ボールを中心とした守備で、ボールへの集結も速い。前線からのプレスで規制をかけるというより、入ってきたところに積極的なチャレンジを仕掛けていき、チャレンジ&カバーの関係性を徹底していた。コレクティブな守備ができており、③渋谷を中心に DF ラインの 4 人のポジションバランスが良く、ボールへは行くが相手の動きに動かされないことによって、不用意に相手にスペースを与えない。また、現在、高校サッカー界で多くのチームが貴重な得点源としているロングスロー、CK に対しては GK①渡辺が高さと空中戦の強さを生かして積極的かつ勇気ある対応を見せたことで、ピンチを防ぐシーンが多く見られた。なおかつ、GK を外した位置へボールを入れざるを得ない状況を作り出せたことが、ゴール前でのアクシデントやミスによる失点のリスク軽減につながっていた。課題として、どこで誰がどう奪うかという狙いを持ったチームまたはグループとしての連動した守備、SB の CB へのカバーリング、中盤の選手のポジションバランスなどが挙げられる。

(2) 浦和東高校

2 トップの高さを生かしてロングフィードを多用し、セカンドボールを回収した 2 次攻撃や、最大の武器であるセットプレーからゴールを目指すスタイルを徹底していた。全員守備でしっかり守り、奪ったら前線に残る 2 トップへボールを配給してカウンターに出る。CB に高さとリーチの長さがあり、空中戦・地上戦ともにゴール前を堅く守る。1 対 1 での忠実な守備、チャレンジ&カバーの安定感、GK 含めて高い集中力でゴールを守れていたが、攻守はやや分業傾向にあった。決勝含めすべての試合で、伝統の粘り強く結果に拘るサッカーを体現した。延長、PK を含めて最後までファイトし続け、県内屈指の強豪校相手に接戦をものにしていく浦東魂は見事であった。その立役者の一人が GK⑫河村で、1 回戦の花咲徳栄戦では PK 戦で 3 本セーブ、3 回戦の正智深谷戦では 2 本セーブしチームの勝利に貢献。準決勝の西武台戦ではゲーム中の PK を 2 本セーブし、3 本目はゴールバーに当たってノーゴールであったが、これまでの驚異的なストップ率が与えたプレッシャーは少なくなかった。GK の出来が試合結果を大きく左右することを改めて感じさせてくれた。

3 総括

各チームが新人戦での課題改善と強化を図り迎えた今大会。そのスタイルは大きく 3 つに分かれた。①日頃のトレーニングや練習試合、県外遠征等で自分たちのサッカーの質を高めて自分たちが主導権を握るサッカーで挑むチーム。②相手との力関係を分析した上で、ゲームプランとして相手に対応したサッカーをする時間を作りながら、スコアや時間によってシステム変更や選手交代をスイッチに勝負を仕掛けに出るチーム。③リーグ戦とトーナメント戦方式の大会を区別し、リーグでは繋ぐシーンでもロングボールを多用する

などリスクや失点を極力回避しながらゲームを進めるチーム。大会を通じて現時点での県内での自分たちの立ち位置がある程度明確に見えた上で、次のインターハイ県予選において各チームがどのスタイルでチームの成熟を図り、大会に臨むのかは注目したい。また、今大会の最有力であった新人戦覇者の昌平を撃破した埼玉栄、その埼玉栄を倒して県の頂点まで上り詰めた武南。浦和東は2回戦で成徳深谷、3回戦で新人戦準優勝の正智深谷を撃破し、準決勝では劣勢の中で西武台に勝っての準優勝。西武台、聖望学園はどちらも新人戦に続き準決勝で涙を飲んだが、今大会の戦いぶりを振り返ると優勝しても不思議ではない試合内容やチーム力であった。その他にも浦和南、成徳深谷など強豪校が僅差で敗戦していることもあり、今後の勢力図がどのように変化していくか楽しみである。武南、浦和東も含め、ここがゴールではなくあくまで通過点である。これからのトレーニングや各リーグ戦、合宿や県外遠征などでのチームとしての成長率の差や成熟度の差が今後の勢力図に直結し、入れ替わっていくだろう。まずは武南と浦和東の両チームが県予選での成果と課題を整理し、本大会で埼玉県の代表校として最高の結果を残してくれることを期待して総評とする。